

予想外だったアメリカ

アメリカが日本から物理的に遠い国であることは言うまでもない。けれど、映画やメディアを通して、どこか近しく感じる国であった。何度か行ったことがあるし、英語の国で、文化に違いはあっても、きっとすぐに馴染めるだろう——そんな思いで、4年前に渡米した。

だが、実際に駐在生活を始めてみると、こうした期待は先入観に過ぎなかったことを痛感することになった。

まず、英語。欧州を含めた非英語圏と比べて、ネイティブの話す速度は、比較にならないほど速く感じた。覚悟はしていたつもりだったが、耳と頭がついていかない。それでもアメリカ人たちが曰く、日本人向けにゆっくり話しているとのこと。日常会話となると、仕事以上に理解が難しかった。4年間で多少は慣れてきたが、それでも「そのうち自然に聞き取れるようになるだろう」と気楽に考えていた当初



写真1. 中西部のトウモロコシ畑
遠方に見えるのはピボット式灌漑装置

の自分の期待とは、現実は大いぶ違っていた。

次にマンハッタン。メディアや旅行を通して知るアメリカは、マンハッタンや西海岸の沿岸部など、まさにハリウッド映画の舞台。これがいわゆるアメリカだと思っていたのだが、とんでもなかった。確かにこれら都心部は想像通りの華やかな街並みだが、広大なアメリカのほとんど、ましてや農業ビジネスのために出張する農業現場は、マンハッタンなどとはまるで異世界。電車は当然なく、車が唯一の移動手段。コーンベルトと呼ばれる中西部には、地平線の彼方まで続くトウモロコシと大豆畑が広がる(写真1)。映画でよく見るマンハッタン、西海岸、ラスベガスなどの街並みは、アメリカ全体からみるとむしろ例外的な場所なのではないか。

もちろん、シカゴ・ヒューストンなどの大都市からは大なり小なりマンハッタンのような雰囲気を感じるが、それとて同国の大部分とは大きく異なるように感じた。メディアのイメージに染まっていた私には、そのギャップは大きかった。

とはいえ、出張・旅行などを重ねるに従って、次第にアメリカ郊外のほうが好きになっていった。ゆっくりとした優しげな生活感が漂っており、むしろ都心部よりも郊外に愛着が湧き魅力を感じるようになっていった。

地図で見るアメリカは広大だ。しかし、暮らしとともに実感したこの国の広さは、地図から想像する以上のものだった。

東～西海岸の都市間のフライトはおおよそ6時間。時差やレンタカーでの移動などを含めると、片道移動だけでほぼ一日が終わってしまうことが多い。出張の効率性を考えて、東海岸での仕事に西海岸の予定を“ついで”に組み込むことが多かったが、そのたびに、“ついで”どころか、感覚的には日本から東南アジアへのお出張に近い距離感を感じた。

アメリカ人と日本人との物の考え方の違いについて感じたことは多々あった。長くなるので多くは割

愛するが、少なくともアメリカビジネスにおける意思決定の速さと合理性は、想像を大きく上回っていた（意思決定が速い分、方針が二転三転することもあるが、ゴールを勝ち取れば良いという目的志向の下では、方針転換の頻度はあまり問題にならないのかも知れない）。もっとも、英語が不慣れな身としては、意思決定だけではなくあらゆる会話が早送りのように感じられたことも事実である。

また、オブラートに包んで表現しがちな日本文化と比べると、アメリカ文化はよほど直接的な文化なのだろうと当初は予想していた。確かにそのような点もあるが、日本よりもアメリカのほうがはるかに間接的な表現を好む文化圏なのではないかと感じることも多々あった。例えば、何か間違いを犯しても直接指摘をされることは驚くほど少ない。また、会議や会食がダラダラと続くことはほとんどなく、閉会とするべきタイミングは予想以上に早く訪れ、空気を読んで察することを求められているような雰囲気があったことを、後から感じたことが多かった。

勤勉さは日本人の取り柄と勝手に思っていたが、ビジネスを通して実感したアメリカ人、特にマネージャー層の勤勉さには驚かされた。休暇の少なさも印象的だった。もともと祝日が少ないうえに、ヨーロッパ人のように数週間まとめて休みを取得する人はほとんどいなかった。ただその分、金曜を半休として土日と併せて三連休のように過ごす人が多いように感じた。

もっとも、アメリカ人と一括りにして語るには無理があるほど、アメリカは日本よりもはるかに多様な社会であり、地域が異なれば多様性は更に広がる。4年間という限られた期間でこの国の本質を理解することは非常に難しいと感じている。あくまで一駐在員の独り言として、読み流していただければと思う。

多様性と関連して、暮らしていた地域はアメリカの中でもインド系住民が多いエリアだった。ちょうど駐在中に、世界で2番目に大きいと言われるヒンドゥー寺院（アメリカでは最大。なお1位はカンボジアのアンコールワットらしい）がプリンストン郊外に完成した（写真2）。「なぜアメリカの話でインド寺院？」と思われるかもしれないが、その規模や完成度、装飾の細やかさに圧倒され、何度か足を運

んだ思い出の場所である。また、自由の女神像（写真3）のような多くの方にお馴染みの建築物のみを紹介するよりも新鮮味があるのではないかと思い、紹介する。

食文化に関しては、個人的には比較的なじみがあ



写真2. プリンストン郊外のスワミナラヤン寺院



写真3. 自由の女神像（左記の寺院は、ここから車で一時間半ほどの南西方向にある）

り想像しやすいものが多かった。ハンバーガー、ステーキ、ピザといった、いわゆる典型的なアメリカの食べ物である。そのなかでも、ケイジャン料理と呼ばれる南部の料理はスパイスがしっかり効いており、魚介を使ったメニューも多く、気に入っていた。

ファストフードは、店が違っていても似たり寄ったりだと思っている。それでも、西海岸限定のハンバーガー店「In-N-Out」と、ネブラスカ州限定の「Runza」には感銘を受けた。特にRunzaはハンバーガーではなく、牛挽肉・玉ねぎ・キャベツを包んだピロシキ風の料理で、すっかりツボだった。自宅でジェネリックRunzaを自作して食べていたほどだ。帰国前には、同僚があまりにランザ、ランザとうるさい日本人を労って、RunzaのTシャツをプレゼントしてくれた(写真4)。

アメリカの広さ…いや、世界の広さを思い知らされた4年間の駐在生活は一瞬にして流れ去った。今では、「本当に駐在していたんだっけ? 狐か狸に化かされていたんじゃないか?」と錯覚するような感覚を覚えることさえある。そんな不思議な気分を抱きつつも、今では日本の生活にすっかり馴染んでいる。(M.S.)



写真4. 同僚からプレゼントしてもらったRunzaのTシャツ